

新医療センター シンポジウム

医師会代表(パネリスト)は、反対署名の開始も表明！？ 会場からは「新医療センター設置問題で、 今やるべきは市民のために一致協力すべき！」の声…

民報
おうしゅう

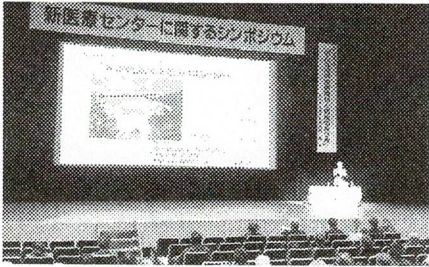
読者版

発行
赤旗奥州出張所
水沢大手町三丁目59
TEL 24-2021
FAX 24-2049

2月24日、奥州市文化会館(乙ホール)を会場に、市主催のシンポジウムが開催されました。当日は、二部構成で開催され、第一部が「新たな地域医療構想と病院のあり方」と題し、全国自治体病院協議会長であり現八幡平市立病院事業管理者兼統括院長の望月泉氏による基調講演、第二部がパネルディスカッションとして、進められました。

パネリストに与えられた時間は、わずか5分間ずつの意見表明と質問対応のみ…

パネルディスカッションは、4名のパネリスト(①倉成淳奥州市長、②郷右近浩 県会議員、③佐々木裕 胆江地区介護支援専門員連絡協議会長、④本田健一 奥州医師会副会長)と



ファシリテーター(今野良奥州市メデイカルアドバイザー・自治医科大学教授)によって進められました。

しかし、パネリストに与えられた時間はわずかに一人当たり5分間のみであり、ほとんどのパネリストが準備してきた原稿を省略しなければならず、決して十分なものとは言えませんでした。さらに、通常のシンポジウムであれば、言い足りなかった点などの補足も出来るよう二回目の発言もあるのですが、今回はその時間配分もなく、意を尽くせないものとなったのではないのでしょうか。

連携の重要性を示したものが奥州市モデルであり、新医療センターはその核となる施設だ…倉成市長

倉成市長は、「地域医療連携の重要性を示したのが奥州市モデルであり、その核となる施設が新医療センターであり必要な施設だ」との見解を示しました。郷右近議長は、「この間、多くの市民から、様々な問い合わせがあり、市の進め方に不信感を持っている」等と述べました。

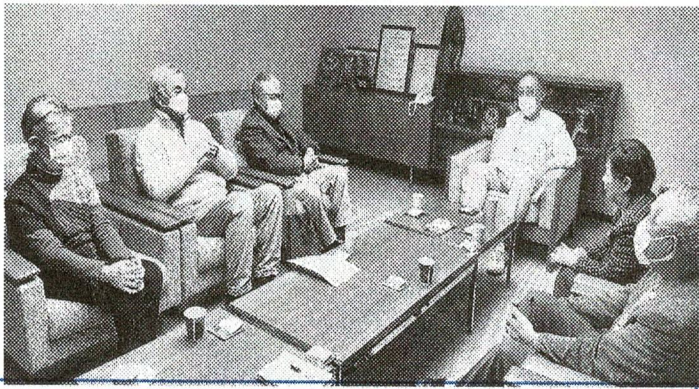
佐々木裕氏は、ケアマネの立場から、「高齢化社会だからこそ、連携がますます重要となり、その核をなす新医療センターは重要な施設となる」と述べました。

最後に発言した本田医師会副会長は、「新医療センター設置は、財政的にも内容的にも全く無謀な計画であり、とても容認できるものではない。今後、地元の県会議員等と会を立ち上げ、提言すると共に、反対の署名活動を進めていく」等と述べました。

周産期医療が必要であり、あらゆる手を尽くして医師確保を確保してほしい…

フロアーからは、●周産期医療は必要であり、あらゆる手を尽くして医師確保をすべき。●東北医科大学からは、ここ1・2年で専門医が増える可能性があると同った。岩手の医療が悪い方向に向っており、将来を見据えた対応が必要ではないか。●北上市では、「認知症になっても安心してくらせるまち」をめざす集会所が開催され、会場は市民でいっぱいだった。奥州市でも今やるべきは、市民のためにみんなが一致協力していくべきではないか、等の意見がありました。

「安心の地域医療をめざす会」が 菊池水沢病院長と懇談



菊池院長と懇談する安心の医療をめざす会のメンバー

2月25日、安心の地域医療をめざす会(宍戸三保子筆頭代表委員)が、水沢病院の菊池淳院長と懇談しました。

参加者は、新医療センター設置に係るシンポジウムの開催(24日)を始め、様々な議論がなされている中で、渦中にある水沢病院の現状と今後について、率直な意見交換を行いました。

感染症や救急車の搬入も増えている

菊池院長は、「医師確保はなかなか難しい問題ではあるが、奥州市の将来を見据えた時に必ず確保し、

地域医療を守っていかなければならないと考えている。また、感染症の対応や救急車の搬入も増えている。しっかりとやっていきたい」と述べました。

耐震化を優先すべき！の議論は既に何年も前に決着した事

出席者からは、「入院患者や職員の安全性確保の点から、耐震化をまずやって、それから時間をかけて市の医療施設がどうあれば良いか検討すれば良いのではないのか？等という議論があるが、その議論は単なる先延ばしに過ぎないのではないか」「耐震化優先の議論は、市議会でも何年も前に既に決着済みの問題であり、耐震化に止まらない大規模な改修が必要となっていることは紛れもない事実だ」との意見が出されました。

市民の盛り上がりは大事ではないか！

菊池院長は、「(皆さんは)10年、15年後の市の医療を本当に保障できるのかと問いたい」「地域医療を守るためには、市民の盛り上がりが必要となってくるのではないかと述べました。